

中華成語故事
滄海桑田（そうかいそうてん）

楠木マリ

「私の調べた諺&慣用句」を書いてくださっている三澤さんが、ご都合で3,4ヶ月お休みをされるので、その間、私、楠木マリがピンチヒッターを勤めます。三澤さんが参照された、中国の故事成句集から言葉を選びますが、三澤さんのように詳細に調べてお知らせすることは出来ません。書いてあるままに、少しでも自分の言葉を添えてご紹介しようと思います。

ピンチヒッターの第一打席は、掲題の言葉です。中国語では、「cāng hǎi sāng tián」日本語では「滄海変じて桑田となる」、ご承知のように、『世の移り変わりは激しい』と言う意味です。桑田は陸地の意味で使われていません、もともとは晋朝、葛洪の《神仙伝・王遠》の中の仙人の会話に、「拜命以来、既に東海が三回陸地となりました」と出てきます。

昔々、中国の仙界のお話です。王遠と麻姑という二人の仙人がおりました。ある時、この二人が、亀の館で宴会をしようと約束をしました。

約束をした当日、王遠は、沢山のお供を従えて、威風堂々と亀の館へ乗り込みました。王遠とそのお供たちは、到着後、亀の館の面々と互いに挨拶を交わし、その後王遠独り、部屋に落着いて、麻姑の到着を待ちました。

ところが、麻姑はなかなか現れません。王遠は麻姑のもとへ迎えの使いを遣りました。暫くするとその使いが戻ってきて王遠に報告しました。「麻姑さまは、私に先ず、あなた様へのご挨拶をお伝えするようとお命じになりました。それからおっしゃるのに、『以前王遠様にお目にかかってから500年余りが経ちました。現在、蓬莱仙島巡視の命を受けておりまして、もう少しで任務を完了いたします。もう暫くお待ちください』とのことでした」それで、王遠は仕方なく、独り仙酒を飲みながら麻姑の到着を待ちました。

待つこと暫し、ついに麻姑が現れました。一見、年の頃十七、八才と見える美しい姿で、腰までもある緑の黒髪をなびかせていました。彼女の衣もまた非常に美しく、材料は何なのか分かりませんでした。目を見張るような光彩を放っておりました。



イラスト：叶霖 (Ye Lin)

お互いに改めて挨拶を交わし、宴会を始めました。供される酒肴の殆どが珍しい草花の類でした。麻姑は王遠に言いました。

「私が天命を拝受して以来、既に3回も東海¹の海原が陸地²に変わるのを目の当たりにしています。今見てきた蓬莱でも、海が以前の半分ほどに浅くなっているのを発見しました。また陸地³に変わってしまうのでしょうか？」

王遠は、ため息をつきながら、「そうなんだ。聖人たちが皆、『東海⁴の海水が少なくなっている。また土埃⁵が舞うようになるだろう』と話している」と相槌を打ちました。

道教の基となった、古くからある中国の民間信仰では、天界と人界の間に仙界があり、仙界の住人たちは天帝の命を受けて人界に係わる仕事をすると考えられています。ここに登場する麻姑も、古くから長寿を司る神として崇められ、昔は高齢の女性に、美しい麻姑が桃を捧げ持つ絵を贈り、その長寿を祝福したそうです。これを“麻姑献寿(má gū xiàn shòu)”と言いました。ご承知のように、“桃”は仙界の女王・西王母⁶に庭に生える桃の木⁷に生るもので、不老長寿の象徴とされ、年画などにもしばしば描かれています。麻姑と西王母は重なる所のある仙人ですね。

このお話は仙界の、気の遠くなるような長いスパンで語られていますが、その意味するところは、「世の中の諸事は移ろい易い」と言うことで、敢えて、我々には見届けようが無い自然の変化を引き合いに出していますけれど、3月11日の東日本大震災を経験した後では、今までと違った説得力をもって響いてきます。中国の人々も、自然の変化ではなく、人工でもたらされる景観の変化を、この言葉と共にかみ締めていることでしょう。